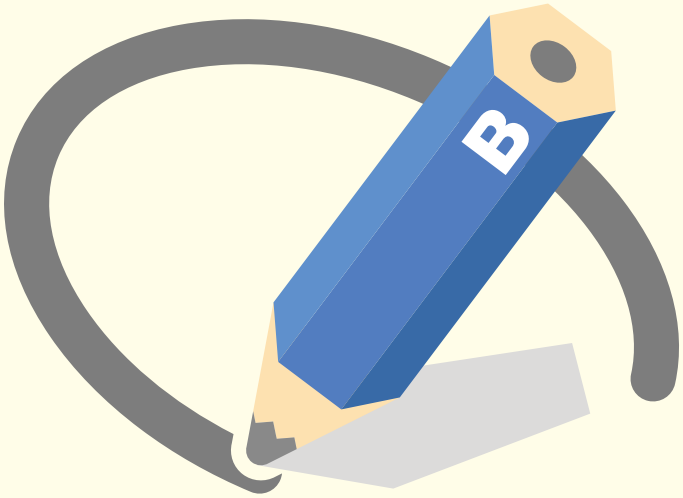
和歌山の教育　基礎・基本

― 学力向上推進に係る研修会のまとめから ―

こんなこと、
あなたの学校では
できていますか？



和歌山県教育庁学校教育局学校指導課

はじめに

子どもたち一人ひとりが確かな学力を身に付けることは、学校教育に関わる者の責務であり、地域、保護者、そして何よりも子ども本人の願いでもあります。

そのため、教職員は子ども一人ひとりと向き合いながら自らの授業を絶えず問い直し、より良き授業を目指して努力を重ねなければなりません。また、学校長は、リーダーシップを発揮し、教職員の力量を高め、組織として機能するための学校経営を進める必要があります。

本資料は、管理職を対象に実施した「学力向上推進に係る研修会」(平成２３年１０月２７日)におけるグループ別協議で出された意見をもとに、市町村教育委員会のご意見もいただきながら、より良き授業づくり・学校づくりに役立てていただくことを目的に作成したものです。

グループ別協議では、「学力向上に向けた取組をどう推進させるか」というテーマで ①授業改善　②補充学習　③学習規律　④家庭学習　⑤地域との連携の５つの観点から、３０グループに分かれて課題と解決策を話し合い、参考となる意見が数多く出されました。

作成にあたっては、できるだけ具体的に表記するとともに、活用しやすいように項目をチェックして確認できる形にしています。内容については、授業を展開する上で共通して大切にしなければならないことや、今後の取組へのヒントを示しています。また、「本時の学習課題（目標）を板書しているか」のように、「当たり前」のことであっても、「徹底されているか」という観点から項目として挙げています。

各学校にあっては、それぞれの実態に応じて、項目等を加除・修正していただき、授業改善や課題解決に向けた取組を推進していただきたいと考えます。

本資料が、先生方の授業力向上や学校経営の活性化に向けた取組の一助となり、和歌山県のすべての学校で、当然と考えられていることが確実にできるよう役立つことを願っています。

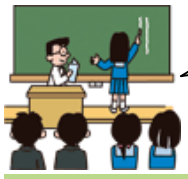
平成２４年２月

和歌山県教育庁学校教育局学校指導課
課長　　田村　光穂

授業づくりの基礎・基本

授業の展開

課題



＊予定時間内に計画した指導内容を終われない授業が見られます。
＊１時間の授業の流れが分からない授業が見られます。

授業は、目標の達成を目指して児童生徒の実態に即して計画・実施されなくてはなりません。よい授業を行うためには、授業の目標と評価、展開、発問、板書など授業づくりの基本を理解し、日々実践を繰り返すことが大切です。

確認

本時の目標

- □ 具体的で明確な目標になっている。
- □ 目標と評価に整合性がある。
- □ 達成目標が子どもの姿でイメージできる。

〈児童生徒の学習活動〉

【導　入】
学習内容に興味をもつ
目標を自覚する

【展　開】
学習内容について個人や集団で考えを深めたり、広げたりする

【終　末】
１時間のまとめや振り返りをする

- □ 本時の目標や学習課題を板書している。
- □ 学習の見通しをもたせている。
- □ 個人で思考する場面がある。
- □ 集団で思考する場面がある。
- □ 書く活動を位置付けている。
- □ 児童生徒に指示や発問が伝わっている。
- □ １～２程度の主発問がある。
- □ 評価する機会や場面がある。

〈授業を振り返って〉

- □ 計画した指導内容を時間内に終えている。
- □ 板書をみて授業の流れが分かる。
- □ 目標が達成されている。

指導計画を立てていれば目標がぶれないので、子どもの実態や反応に応じて授業の展開が変わっても柔軟に対応することができます。

発　問

課題

＊いつも教師主導の一問一答式で授業が進行しています。
＊教師が一方的に話をする授業が見られます。

発問は、１時間の授業をゴールに導くための道標です。ゴールは同じでも指導者や児童生徒の実態によって道順はさまざまです。展開に応じて、「ここで、何のために、何を考えさせればよいか」を考慮した発問をすることが大切です。

〈授業の各段階での児童生徒に期待する姿〉

	確認
【導　入】 関心･意欲を喚起する発問 既習事項を確認する発問 学習課題につなげる発問 など	□　本時の課題を全員が把握できている。 □　学習課題に向かう意欲を喚起できている。
【展　開】 自分の考えやイメージを広げる発問 比較させたり、分類させたりする発問 判断させる発問 考えの根拠を述べる発問 視点や発想の転換を促す発問 対立や葛藤場面をつくる発問 など	□　多様な考えが引き出されている。 □　個々の思考に深まりや広がりが見られる。 □　個人の発言を全体に広げられている。
【終　末】 学習したことを整理･定着させる発問 自分を振り返らせる発問 など	□　本時の学習の成果を一人ひとりが自覚できている。

〈授業を振り返って〉

□　適切に指導過程にそった発問がなされている。
□　全員が理解できる明確な発問である。
□　語尾まで意識しながら丁寧に問いかけている。
□　発問の前後の「間」を大切にしている。

ゴミをテーマにした発問でも、「ゴミはどこで見つけましたか」（覚える）、「なぜ、ゴミはそこにあったと思いますか」（理解）、「校庭にゴミが散乱する理由は何だと思いますか」（分析）、「ゴミの散乱についてあなたはどう思いますか」（評価）など、問い方で思考の仕方は異なります。どの場面でどんな発問をするかはとても重要です。

（出典『「考える力」はこうしてつける』ジェニ・ウィルソン＆レスリー・ウィング・ジャン著吉田新一郎訳新評論P95より）

主体的な学び

課題

＊グループ学習に深まりがない場合が見られます。
＊学習課題が自分たちのものになっていない活動が見られます。

児童生徒が主体的に学ぶためには、活動の手順や見通しをもたせるとともに、交流や話し合いの目的や思考過程を明確に指示することが必要です。

また、「一斉学習でもグループ学習でも、学び合える学級集団を育てる」という意識をもって指導にあたることが大切です。

〈学習形態例〉

一斉学習
グループ学習
ペア学習
など

確認

- □ 基本話型等を身に付けさせている。
- □ 聞く指導を徹底している。
- □ 発言が一部の児童生徒に偏っていない。
- □ 授業の展開に応じて学習の形態等を工夫している。

- □ 「何を」「何のために」話し合うのか、目的を意識させている。
- □ 主体的な学習活動につながる思考過程にそった具体的な指示を出している。

〈目的の明確化〉

交流しましょう → 話し合って考えを一つにまとめましょう
交流して、共通点や相違点を見つけましょう

交流の目的は、他にも「発想を広げる」「参考にする」「対比する」「意見を求める」「いろいろな視点から検討する」などさまざまです。活動のねらいにそった学び合いを学習活動にうまく取り入れましょう。

〈思考過程にそった具体的な指示〉

調べて分かったことを整理しましょう →

① 調べて分かったことを書き出しましょう
② 書き出したものを似たものどうしに分類しましょう
③ 分類したグループに名前を付けましょう

〈活動を通して〉 確認

- □ 「話し合ったこと」が意味あることと実感できる授業展開である。
- □ 「子どもと子どもをつなぐ」適切な指導・助言を行っている。

書く活動

課題

＊ノート指導が学校全体の取組に広がっていかない状況が見られます。
＊具体的なノート指導の在り方がなかなか見つかりません。

書く活動を通して書く力を育み、考える力を育てます。書く活動の基本的な取組がノート指導です。ノートの書き方にはいろいろな方法がありますが、まずは、「基本的なことを全員ができるようになる」ことが大切です。

〈ノートの記入内容例〉

① 日付・教科書のページ等
② 学習のめあて（学習課題）
③ 板書記録
④ 結果や事実の記録
⑤ 自分の考え
⑥ 友達の考え
⑦ まとめや感想（振り返り）

確認

□ 板書計画を立てている。
□ 全員にノートを書かせている。
□ ノートに自分の考えを書く時間を確保している。
□ 書いている途中に発問や指示をしない。
□ 定期的にノートを回収し、点検している。

書く活動により、児童生徒は思考過程を整理し、考える内容を明確にすることができます。書く活動を充実させるためには、「何をどのように書かせるか」、「書いた内容をどう評価するか」という視点を指導者がしっかりともち、きめの細かい丁寧な指導を行うことが大切です。

〈全国学力・学習状況調査の問題例〉

【国語】
☆ 「～から（理由）、～がよい（意見）。」という形で一文で書く。
☆ 評価した理由を４０字以内で説明する。
☆ 自分の考えとその理由を条件にしたがって書く。

【算数・数学】
☆ 二つを比べて、そのちがいを言葉や数を使って説明する。
☆ 言葉や数を使って求め方を書く。
☆ 言葉や数を使って理由を説明する。
☆ 予想が正しいことを説明する。
☆ 選んだ理由を説明する。

確認

□ 各教科等で学習する用語や表現を使って書かせる。
□ 主語・述語を明確に書かせる。
□ 理由や根拠を書かせる。
□ 方法や考え方を書かせる。
□ 比較して書かせる。
□ 条件（字数、テーマ等）に合わせて書かせる。

授業研究の活性化

課題

＊授業を参観する視点が確立されていません。
＊研究協議の時間が十分に確保されていない状況が見られます。
＊研究授業の成果を実践に生かせていない状況が見られます。

授業改善を進めるためには、研究授業（事前研究・事後研究）の充実を図り、子どもの姿に視点をあてた授業分析をすることです。そのためには、各学校の実態に応じて研究授業の在り方を検討することが必要です。

学校として　確認

- □ 年度当初に学校の研究主題について全教職員の共通理解を図っている。
- □ 研究授業の年間計画を立てている。
- □ 学習指導案の書き方のマニュアルを作成している。（参考）大岱小学校ＰＴＳノート
- □ 授業評価カード等を作成している。（参考）大岱小学校ＰＴＳノート
- □ 十分な教材研究や授業研究の時間を確保している。
- □ 本時の目標の根拠となる学習指導要領、学習指導要領解説を共通理解している。
- □ 全体討議、ワークショップ、ビデオ活用など、研究協議のもち方を工夫している。
- □ 研究協議で研究授業の成果と課題をまとめ、振り返りを行っている。

※東京都東村山市立大岱（おんた）小学校元校長　西留安雄（にしどめやすお）　氏を、10月27日の講師として招聘しました。

研究授業の年間計画は、授業実施日だけでなく、指導案提出日、事前検討会の日程など、綿密な計画を立てて時間を確保することが大切です。
大岱小学校ＰＴＳノートは参考資料データの中にありますので、ご活用ください。

参観者として　確認

- □ 本時の授業の目標と指導内容・協議の視点を共通理解して参観している。
- □ 達成目標を児童生徒の姿で具体的にイメージしている。
- □ 児童生徒の反応や変容をみとっている。
- □ 学んだことを自分の授業に生かすという視点で参観している。

学習集団の基盤づくり

課題

＊組織として共通理解がなく、指導者の意識に差が見られます。
＊授業中の私語等けじめのなさが見られます。
＊特別な支援を必要とする児童生徒への対応が共通理解されていません。

規範意識の醸成や習慣付けは、年齢が上がるほど指導が難しくなります。低学年のうちからルールを守ることや習慣付けをするとともに、小さなことを見逃さず、継続的に指導することが大切です。

規則と習慣

確認

- □ 教師が模範となっている。（時間厳守、服装など）
- □ 学校の学習規律等を明文化し、年度当初に共通理解を図っている。
- □ 児童生徒のある問題行動に対して、教職員全員が一貫した指導をしている。
- □ 各校種・各学年等、発達の段階に応じて身に付けさせることを明確にしている。
- □ 保護者等への啓発・連携を密にしている。

心を育てる

- □ 学校長は道徳教育の方針を明確に示している。
- □ 道徳教育推進教師を中心とした指導体制を充実している。
- □ 道徳教育の全体計画、道徳の時間の年間指導計画等について共通理解を図っている。
- □ 参観日等を利用し、道徳の授業を公開するなど保護者に対する啓発を行っている。

個に応じた指導

- □ 特別支援教育コーディネーターがその役割を果たせる校内体制を整えている。
- □ 個別の指導計画、個別の教育支援計画を作成し、組織全体で共通理解を図っている。
- □ 特別支援教育に関する校内研修を年間計画に位置付けている。

「発達障害児指導事例集（平成２１年３月）」を学びの丘ＨＰにアップしていますので、参考にしてください。

「家庭学習の充実」「補充学習の充実」「地域との連携」については、
出された意見を課題解決策の一例として示しています。

家庭学習の充実

＊学級担任によって、宿題の量に差が見られます。
＊10分間×学年などの家庭学習の習慣が身に付きません。
＊家庭学習の成果がなかなか確認できません。
＊保護者の協力をなかなか得られません。

☆　小・中学校で、家庭学習の時間や取組について共通理解を図る。
☆　家庭学習の手引きなどマニュアルを作成する。
☆　計画表やチェックシートを作成したり、課題の出し方を工夫したりして、自ら学ぶ力を育てる。
☆　保護者に対し全国学力・学習状況調査や学校評価の結果を公表し、啓発する。
☆　次の授業に生かしたり、確認小テストをしたりするなど家庭学習の成果が見られるような取組を取り入れる。
☆　宿題を毎日チェックし、評価する。

補充学習の充実

＊時間や教材の確保が難しいです。
＊どのような教材を扱えばよいのか分かりません。
＊学習意欲を継続するのが難しいです。

☆　補充学習の目的や取組について共通理解を図る。
☆　校務分掌に補充学習を推進する担当を位置付ける。
☆　教育計画に補充学習の時間を位置付ける。
☆　授業のねらいに達成できなかった児童生徒に対して必ず実施する。
☆　指導者が各児童生徒が分かるところまでフィードバックして、個別に対応する。
☆　「ことばの力向上のための参考資料集」等、提供されている教材を収集し、活用する。
☆　補充学習の成果を検証するため、到達度テストなどを効果的に活用する。
☆　保護者への周知・啓発を行う。
☆　地域人材やボランティア等の協力を得る。

地域との連携

課題

＊学校が望むことと、学校に期待されることにずれが見られます。
＊ボランティア活動への参加希望者が少ないです。
＊学校に来られる方が偏っています。
＊年間計画等の作成がたいへんです。

☆　学校運営上、地域との連携の必要性について校内で共通理解を図る。
☆　共育ミニ集会等で地域の方や保護者の願いや思いを理解する。
☆　学校支援ボランティアの募集を含め、学校や児童生徒の様子について積極的に広報活動を行う。（ホームページや学校便りなど）
☆　図書ボランティアの依頼など、できるところから学校を開く。
☆　校内に地域の方が気軽に集まれる場所をつくる。
☆　「ここから始めるつながりづくり（和歌山県教育委員会）」リーフレットを参考に、できるところから実践する。

学力向上に向けた取組をどう推進させるか

５つのグループ別協議をとおして共有された、学力向上に向けた取組を推進するために重要であると考えられることを、以下６点にまとめました。

学校長のリーダーシップで、学校は変わります。

①　各部の学校のリーダーが動きやすい組織・体制を整える

②　取組について教職員の共通理解を図る

③　取組について段階的な具体の姿を示す

④　校種間の連携を密にし、発達の段階に応じた児童生徒につけたい力を明確にする

⑤　家庭や地域と連携・協力した取組を活性化する

⑥　学校評価（自己評価・学校関係者評価等）など、客観的な評価を活用する